



TOMAS CG Collection
Short Story Series Vol.12

EVA的艦娘これくしょん
蒼龍編

























































































「ふふ、我々をさんさん手こぼらせた女も、ごんなって
しまつては無様なものだな…」

煽り立てるように恥辱の言葉を浴びせかけ
彼女を挑発する

「ム……」



「ふふ、我々をさんさん手こずらせた女も、こいつなつて
しまつては無様なものだな…」

煽り立てるように恥辱の言葉を浴びせかけ
彼女を挑発する

「ム……」

彼女は湧き上がる感情を唇を噛みしめて
押し殺し鋭い眼光で睨みつけた

「散々その体を嬲られながらも、まだ心
までは屈してはいないようだな」
「だからこそおれの出番というわけだ」

「……………」

「怯えているのか？」

「へ、別にアンタなんて怖くないわ…」

「そうか？何をされるか、不安で堪らない
ように見えるがな」

傍らに並べられた性具へと目をやり、思案を巡らせながら
一つを手に取った

「ククク、安心しろ、俺は紳士的な男だ、女の扱いは
十分に心得ているぞ」

彼女は湧き上がる感情を唇を噛みしめて
押し殺し鋭い眼光で睨みつけた

「散々その体を嬲られながらも、まだ心
までは屈してはいないようだな」
「だからこそおれの出番というわけだ」

「……………」

「怯えているのか？」

「へ、別にアンタなんて怖くないわ…」

「そうか？何をされるか、不安で堪らない
ように見えるがな」

手にした器具の先端を彼女の陰部へと挿みこめ
上下に動かす

「んっ…」



手にした器具の先端を彼女の陰部へと這わせぬっぺん
上下に動かす

「んっ…」

ひんやりとした器具の感触にきゅっこと
肛門が収縮する

「な、なによ、偉そうな事言って、
結局アンタもほかの男と同じじゃない」

「同じっ？ いや違うな」

「ヒッー？」

器具の先端を肛門へとあてがうと、先端をくねらせながら、
小さく閉じた入口をこじ開けるようにして押し込んでゆく



「ヒュー？」

器具の先端を肛門へとあてがうと、先端をくねらせながら、小さく閉じた入口をこじ開けるようにして押し込んでゆく

「前の穴はもう皆さんさん男に弄ばれたらう、
だがこっちの穴はどうかな？」





「前の穴はもうさっさん男に弄ばれたろう、
だがこっちの穴はどうかな？」

「ヒミー？ そりはひ…ひんー」



「前の穴はもうさっさんさん男に弄ばれたらう、
だがこっちの穴はどうかな？」

「ヒッキー？ そりはっ…わんー」

押さえ込んでいた感情は一気に爆発し、大きな喘ぎと共にその証を溢れださせた





「前の穴はもう皆さんさん男に弄ばれたらう、
だがこっちの穴はどうかな？」

「ヒミー？ そりはひ…ひんー」



「ちよっど、まっこ…いやっ、あぶっ…ん…」

連結された大小の突起が飲み込まれる度、
呻くような声を漏らす

「ふふ…やはりこっちはまだ処女のようなだな」

根元まで器具を挿入すると、今度は円を描くように
動かしながらゆっくりと出し入れする

「あッん…Vann…んっ…」



自らの腸内深くを掻き回す冷たく無機質な道具の感触に
顔を歪め耐え続ける
不快感に必死に耐えている彼女の表情や呻きを楽しみ
ながら、徐々に刺激を強めてゆく





自らの腸内深くを掻き回す冷たく無機質な道具の感触に
顔を歪め耐え続ける
不快感に必死に耐えている彼女の表情や呻きを楽しみ
ながら、徐々に刺激を強めてゆく

その刺激に反応するように、閉じられていた
膣口は小さな入り口を覗かせ、その奥から
滲み出すようにして粘り気のある透明な
愛液が溢れ出し始めていた

愛液を指先に絡め、柔らかくぬめる肉の
部分をなぞってゆく

「んっ…はあっ…はあ…」

クチュクチュと水気を帯びた音と共に、彼女の呻きは次第に喘ぎへと変わりつつあった



息遣いが次第に大きくなり、時折小刻みに体を小さく震わせる

「んっ…んっ…ハアッ…」

何かに耐えるに押し殺すような喘ぎを漏らす



息遣いが次第に大きくなり、時折小刻みに体を小さく震わせる

「んっ…んっ…ハアッ…」

何かに耐えるに押し殺すような喘ぎを漏らす

「んっ…んっ…うっだっ」

「別に…何でも…ないわ」

「何でもない？」「コはそうは見えないがな」

「気持ちよくて仕方がないんだろう？」

「快楽に身を委ねてしまいたいんだろう？」

「い、こんなの…不快なだけ…よ…」

「その割には表情にも女の部分が見え隠れしているようだがな。不快感を感じるとお前の体はこういう反応をするのか？
実に面白いな」

厚みを帯びた陰唇部分をつまんだり伸ばしたりしたりしながら
小さく突起したクリトリスを指先で撫で回し刺激を加える

「あぁっ…やっ…んぁっー」




厚みを帯びた陰唇部分をつまんだり伸ばしたりしたりしながら
小さく突起したクリトリスを指先で撫で回し刺激を加える

「あぁっ…やっ…んぁっー」

挿入した器具をさらに激しく動かし、刺激を
与えると、絡みついた粘液が飛沫となって
飛び散る

「あっ…あぁっ…ハァアッー」





陰唇を指先で弄びながら小さなしこり程度のクリトリスを包皮の上から優しく撫で回す

まだ初々しさを感じさせる薄いピンク色の秘肉の奥には小さな膣口が顔を覗かせ、じんわりと愛液を潤ませていた



ペニスを割れ目に浴つて上下に擦りつけながら
愛液を絡ませ、ゆっくりと腰を沈めてゆく

「へっ…あっ…んっ…」

ペニスを割れ目に浴つて上下に擦りつけながら
愛液を絡ませ、ゆっくりと腰を沈めてゆく

「へっ…あっ…んっ…」

メリメリと小さな入口をこじ開ける
感触は亀頭からカリの部分へと移り、
ペニス全体がじんわりとした
暖かさに包まれる

「うっっ…んっ…はあ…はあ」

「ふふ、処女特有の固さはまだ残っ
ているが男の受け入れ方はたいぶ
心得てきたようだな」

「ご、ごんなの…痛いだけよ…」

「ふふ、そうは見えんがな」

愛液で潤った膣内は彼女の意志に反し、挿入されたペニスをさらに奥へと招き入れるように肉ヒタガ際立ち小刻みに蠕動していた

メリメリと小さな入口をこじ開ける
感触は亀頭からカリの部分へと移り、
ペニス全体がじんわりとした
暖かさに包まれる

「うっっ…んっ…はあ…はあ」

「ふふ、処女特有の固さはまだ残っているが男の受け入れ方はだいぶ心得てきたようだな」

「ご、ごんなの…痛いだけよ…」

「ふふ、そうは見えんがな」

「Run- Run-」

強烈に絡みつくその締め付けは、
みるみる快感を増大させ、鮮明に
させてゆく


「んっ…っ、これはたまらん…」

ストロークを抑え、なんとか維持
させようとすも、濃厚に凝縮する
快感はその堰を乗り越え一気に
ペニスへと押し寄せた





密着させた体をさらに押し付け、亀頭を
子宮口へと押しつけるようにして、快感を
一気に爆発させた



愛液で潤った膣内は彼女の意志に反し、挿入された
ペニスをさらに奥へと招き入れるように肉ヒタガ
際立ち小刻みに蠕動していた

「ぐんぐん、お前の膣内の肉ヒタひとつひとつが
ペニスに絡み付いてきているぞ」

カリの部分を膣壁に擦り付けるようにしながら
ゆっくりとした動きで出し入れし、プリプリと
弾力のある膣内の感触を楽しむ

「んっ…んっ…はあっ…」

カリが肉ヒタを捲りあげる度、堪えきれない様子で喘ぎ声を漏らし、きゅっつとペニスを締め上げる

「おおっーぢ、さすがに締まりがいいな
まるで握られてるようだ」

「ぐんっ、お前の膣内の肉ヒタひとつひとつが
ペニスに絡み付いてきているぞ」

カリの部分を膣壁に擦り付けるようにしながら
ゆっくりとした動きで出し入れし、プリプリと
弾力のある膣内の感触を楽しむ

「んっ…んっ…はあっっ…」

カリが肉ヒタを捲りあげる度、堪えきれない様子で喘ぎ声を漏らし、きゅっつとペニスを締め上げる

「おおっーぢ、さすがに締まりがいいな
まるで握られてるようだ」

強烈に絡みつくその締め付けは、
みるみる快感を増大させ、鮮明に
させてゆく

「んっっ…っ、これはたまらんっ…」

ストロークを抑え、なんとか維持
させようとすも、濃厚に凝縮する
快感はその堰を乗り越え一気に
ペニスへと押し寄せた

両手を縛り付け、下半身をさらに露にさせた

「ちよつと、何するのよー」

「ふふ、暴れられては困るのでね、
少しばかり我慢してもらおうか」

「……………」

「どうした、怖いのか？」

「……、恐くなんてないわ」



両手を縛り付け、下半身をさらに露にさせた

「ちよつと、何するのよっ」

「ふふ、暴れられては困るのでね、
少しばかり我慢してもらおうか」

「……………」

「どうした、怖いのか？」

「……、恐くなんてないわ」

「そうか？ だいぶ声がうわずっているように聞こえるがな」

「ふっ、心配するな、別に殺そうというわけじゃないんだ」

「それじゃ何をするつもりなの？ こんな事をして私を
調べても何の秘密も出てこないわよ」

「まだ誤解しているのようだな。俺はお前から何かを
聞き出そうなんて考えてもいないぞ」

後ろからバイブレーターをねじこみ、スイッチを入れた
挿入されたバイブレーターは鈍い音を立てながら膣内でうねり
刺激を与える

「ひゃっ……んっ……」



後ろからバイブレーターをねじこみ、スイッチを入れた
挿入されたバイブレーターは鈍い音を立てながら膣内でうねり
刺激を与える

「ひゃっ……んっ……」

膣内を掻き乱すバイブレーターの刺激に堪らず声を漏らす

「ふっ、ずいぶんと感度がいいじゃないか。この程度の玩具は
もう十分経験済みか？」

「そ、そんなワケないじゃないっ」

「そうか？ お前の程の女だ、これまであらゆる男どもの欲望のはけ口として弄ばれてきたのだろう？」
「いや、相手をしてきたのは男だけじゃないか？ ククク…」

「そ、そんなのアンタに関係ないでしょっ」

「ふっ確かに、お前の遍歴などどうでもいい事だ」

膣内を掻き乱すバイブレーターの刺激に堪らず声を漏らす

「ふっ、ずいぶんと感度がいいじゃないか。この程度の玩具はもう十分経験済みか？」

「そ、そんなワケないじゃないっ」



「そうか？ お前の程の女だ、これまであらゆる男どもの欲望のはけ口として弄ばれてきたのだろう？」
「いや、相手をしてきたのは男だけじゃないか？ ククク…」

「そ、そんなのアンタに関係ないでしょっ」

「ふっ確かに、お前の遍歴などどうでもいい事だ」

「しかしお前の体がどこまで調教済みか、それを調べるのも一興というわけだ」

「とうやらオマ○コの方はだいぶ調教されているようだがこっちの穴はまだ未開発のようだからな」

「Hミー？」

「イヤミぞいっはっ……」

ひんやりとしたアナルピースの感触に体をビクッと震わせる

「ケツの力を抜け、そうしないとかえって苦しくなるぞ」

侵入を拒むようにぎゅっと閉じられた替へとグイグイと
押しこんでゆく

「きっひん……あめっ……んん」



「イヤミぞっはっ……」

ひんやりとしたアナルピースの感触に体をビクッと震わせる

「ケツの力を抜け、そうしないとかえって苦しくなるぞ」

侵入を拒むようにぎゅっと閉じられた蕾へとグイグイと押しこんでゆく

「きっひん……あぁっ……んん」

ずぶずぶとピースの先端が飲み込まれ、異物感に
呻くような声を漏らす

「あうっ……いやぁあ、やめてようっ……」

「ククツ、最初のうちは腸内を掻き回される不快感しか
感じないかもしれんが、すぐによくなくなるさ」

「お前にあらゆるプレイを教え込んでやろう。
まだ自分の知らない性癖に目覚めるかもしれないぞ」

「うう…そんなもの知りたくないわよ」

「ふふ、ついでにこんなのはどうだ？」

火をつけたろうそくをかざし、彼女の上で
ゆっくりと傾けた

ずぶずぶとピースの先端が飲み込まれ、異物感に
呻くような声を漏らす

「あうう…いやああ、やめてようう…」

「ククツ、最初のうちは腸内を掻き回される不快感しか
感じないかもしれないが、すぐによくなくなるさ」

熱く溶けたロウが彼女の体のうえにポタポタと滴り落ちる

「わーっ」

「どうだ？ このプレイは初めてか？」

「なっ何するのよう、熱いじゃないっー」

「ふふ、これはこういうプレイ専用の蠟燭でね、体を傷つけるほどの火傷は負わせないから安心するがいい」



熱く溶けたロウが彼女の体のうえにポタポタと滴り落ちる

「わーっ」

「どうだ？ このプレイは初めてか？」

「なっ何するのよう、熱いじゃないっー」

「ふふ、これはこういうプレイ専用の蠟燭でね、体を傷つけるほどの火傷は負わせないから安心するがいい」

「こういうプレイってなにによっー！ こんな事して「一体何が楽しいの？ アンタ頭がおかしいんじゃないの」

「へへへ、相変わらず口だけは威勢がいいな。」

「これはお前のような気の強い女に効果的なプレイなのさ」

垂らした涎は彼女の体にまとわりついて固まり積み重なると、
今度は蓄えられた熱が彼女の肌をじんわりと焼き痛めつける

「やっ、やめてよっー」

身をよじらせ熱さから逃れようとする

「やめてほしいか？ なら『私はあなたの従順なペニスを
淫乱なメス豚としてやさしく飼育してください』
そうすれば止めてやるぞ」

と囁く。おんおん



垂らした涎は彼女の体にまとわりついて固まり積み重なると、
今度は蓄えられた熱が彼女の肌をじんわりと焼き痛めつける

「やっ、やめてよっー」

身をよじらせ熱さから逃れようとする

「やめてほしいか？ なら『私はあなたの従順なペットです。淫乱なメス豚としてやさしく飼育してください』
そうすれば止めてやるぞ」と言っしみる

「なっ、なによそれっー そんな事言はずないでっみ、バカじゃないのっ？」

「ククっ、そのバカにいいように弄ばれているお前は どうなんだっ？」

「こんな事して喜ぶなんて、アンタ完全にイカれてるわ」

「まったく口の悪い女だ。いいのか？ ご主人様にそんな口を利いてっ？」

わらわにロウソクを滴らせる

「ひっ…ひいてー」

「ふふ、熱いだろう。とうだ？」

「少しは素直になる気になったか？」

「だ、だれがアンタなんか…」



わらわにロウソクを滴らせる

「ひっ…ひいっー」

「ふふ、熱いだろう。とうだ？」

「少しは素直になる気になったか？」

「だ、だれがアンタなんか…」

「強情を張ったところで何の得もないぞ。もつとも俺を楽しませたいというのなら大歓迎だがな」

「ううう…なんて男なの…」

「…今まで何人もの男が私を弄んだけど、その中でもアンタはとびきりのヘンタイよっー」

「言ってくれね。なるほど、お前には苦痛を伴う行為はかえって反発を招くだけのようだな」

「それならそれでまた別の方法で楽しむまでさ」

挿入されたバイブとアナルピースを同時に出し入れしながら刺激を加える

「ひいいいっ…やっ…あああっ！」

「強情を張ったところで何の得もないぞ。もっとも俺を楽しませたいというのなら大歓迎だがな」

「ううう…なんて男なの…」

「…今まで何人もの男が私を弄りだけど、その中でもアంతはとびきりのヘンタイよっ！」

「言ってくれね。なるほど、お前には苦痛を伴う行為はかえって反発を招くだけのようだな」

「それならそれでまた別の方法で楽しむまでさ」

挿入されたバイブとアナルピースを同時に出し入れしながら刺激を加える

「ひいひいっ…やっ…あああっ！」

膣内と腸内を同時に掻き乱され、快感と不快感が同時に彼女の体を貫く。今まで体験したことのない強烈な感覚にビクビクと体を震わせ悶える

「ククク、どうだ？ 快感は苦痛以上耐える事が困難だろう」

激しく出し入れするバイブに絡みついた愛液が飛び散りながらポタポタと床に滴を落とす

「ひあああつ…いやあつ…許してつ…許してええつ…」

「ふふっ、いい反応ができるじゃないか。そう、そういう反応を見たかったのだよ」

悶え乱れる彼女の反応を楽しみながら二本のバイブを一層激しく捏ね回す

「あああつ、だめっ！だめええーっ！」

膣内と腸内を同時に掻き乱され、快感と不快感が同時に彼女の体を貫く。今まで体験したことのない強烈な感覚にビクビクと体を震わせ悶える

「ククク、どうだ？快感は苦痛以上耐える事が困難だろう」

激しく出し入れするバイブに絡みついた愛液が飛び散りながらポタポタと床に滴を落とす

シヤアアアア...

執拗で容赦ない責めに、ついに耐えきれなくなった彼女は、大きな叫び声と共に股間から黄金色の液体を溢れさせた

「あ...あああ...」

「おやおや、お編らしとは、まったくはしたない女だ」

「はあ...はあ...」



シヤアアアアー…

執拗で容赦ない責めに、ついに耐えきれなくなつた彼女は、大きな叫び声と共に股間から黄金色の液体を溢れさせた

「あ…あああ…」

「おやおや、お漏らしとは、まうたくはしたない女だ」

「はあ…はあ…」

「くくっ、人を散々ヘンタイ呼ばわりしておきながら、

自分はオマ○コとケツの穴にパイプを啜えてお漏らしとはずいぶん体を張つた冗談を見せてくれるじゃないか」

「おれも色んな女を相手してきたが、お前のような恥知らずの女は初めてだな」

「部屋中にお前の小便の臭いが立ち込めているぞ」


恥辱を植え付けられるように屈辱的な言葉を
次々と浴びせかける

「んんん…んんん…んんんん…」

彼女は唇をかみしめ溢れ出そうになる感情を
くつと堪えていた

「くくっ、人を散々ヘンタイ呼ばわりしておきながら、
自分はオマ○コとケツの穴にパイプを啜えてお漏らし
とはずいぶん体を張った冗談を見せてくれるじゃないか」
「おれも色んな女を相手してきたが、お前のような
恥知らずの女は初めてだな」

「部屋中にお前の小便の臭いが立ち込めているぞ」



彼女の体を起こし四つん這いの格好に
させ、お尻をいっぱい突きあげさせる

「ふふ、今度は俺自身がお前の体の
具合を確かめてやろう」

小ぶりで張りのあるお尻を後ろから
鷲掴みにすると左右に押し広げた

既に十分な愛液で潤ったその部分は、
ペニスを待ち受けていたかのように
小さな膣口を覗かせていた



割れ目にそってペニスをなぞりながら
愛液を絡ませた後、ピンク色の肉穴へと
押しつけた

「ひっ…うっ…」

彼女の秘穴は固くいきり立ったペニスを
拒む事なく、吸いつくように招き入れた

「お…おお…」

ぬるぬるとした滑らかな感触がペニスを
じんわりと生暖かく包みこむ



少しずつなじませるようにゆっくりと
深いストロークで前後に腰を動かす

「ムン…ムン…」

ペニスを出し入れする度、絡みついた
腔壁がペニスを離すまいと捲れ上がる

「おお…いい具合に纏わりついてくるな」



狭く細い膣内はペニースに完全に密着し、
出し入れする度に膣壁を外側に捲りあげ
ながら纏わりついてくる

「くくく、まるでパキユームフレラを
されてるような感じで付らくるぞ」


「はあ…はあ…んっ…」

彼女は声を押し殺すような喘ぎを漏らす

「ふふ、どうした？ 我慢せず感じるままを
声に出していいんだぞ」

「な、何も感じないわよ」

「くくっ、まるで自分に言い聞かせている
かのようだな」



円を描くように腰をくねらせながら、
ゆっくりと深いストロークでペニスを
出し入れする

「やっ、はあっ…う…動かないで…」

「くくく、最低な男のペニスの味はどうだ？
悪くはないだろう」

「多くの女を虜にしてきた自慢のモノだ、
コイツの味を知った女は俺に嫌悪を
抱きながらも誘惑に抗えず堕ちてゆく、
お前も例外なくそうなるのさ」



「ハア…ハア…私は…そんな女じゃない…」

「いや、お前はそんな女だ、そろそろっー」

息を荒げながら獣のように腰を突き入れ
快感を貪る
グチヨグチヨと汁気のある粘液がピストンで
白濁し、泡を吹きながら淫臭を漂わせる

「ア、アンタなんかには私は…くっ…はあっー」




「さっ、どうして...どうして男のペニスって
こんなに気持ちいいの...!」

「ダメ...!のままじゃ負けちゃう...!」

「私...負けちゃうの? だめ、こんな男に
負けちゃ...でも...もう負けてもいいかも...!」

「だ、だめよっ、ああ...いいっ...とっちな...
気持ち良すぎて頭の中がクラクラするよう...
何も考えられないようっ...!」



溢れかけ、表面張力のように保っていた快樂の
均衡は一気に崩れ、大きなうねりとなって
溢れだし、彼女の全身を飲み込んでいった

「あああっ…すっ…い…くるん…」

強烈な快感が彼女の体を支配し、津波のように
何度も押し寄せては返す。
その度に挿入したペニスを痛いほどに締め付け
まだ射精に至らないペニスから精液を絞り
取ろうとしていた

「それじゃ今度は俺もイかせてもらおうとしてよ。濃厚な欲望の証をその子宮内でたつぷりと受け止めるがいいっ」

彼女の体をかかえあげ、跳ね上げるように突き上げながら自らを
一気に射精へと導いた

「うっ……くっ……おおっ」

「あっあっ……あああ——っ」

「やめっ、ひいっ……ひい——っ」

突き上げる度、生暖かい潮を吹きださせながら
悲鳴のような喘ぎを漏らす

「havin……ninin……nn……ひっ——」

「vvvv、^^^、もう頭の中は快感でいっぱいなのよ？」

「ああっだめっ……また……きちやんっ——」

「おやおや、またか？まったく早漏な女だ」

「ふ、ふさけないでっ…アンタみたいな男に…」

彼女の腰を掴み、グリグリと押し付けるようにして腰を動かす

「ひいっ…ダメッ…やっ…はあんっ」

「ふふふ、俺みたいな男に、なんだって？」

ペニスの先端が弾力のある壁のような感触を捉え、それを押し返すようにしてさらに突き上げる

「ふふ…感じる感じる、お前の膣内の鼓動がな」

締め付ける膣壁を押し返すようにしてペニスに力をこめる

「あっんっ」

快感で満たされた膣内をさらに刺激され、堪えきれない様子で喘ぎを漏らす

「ふふっ、ずいぶんと女々しい反応ができるじゃないか」

「気分はすっかり互いを求めあう男と女、といった感じかな？」

ペニスが完全に彼女の体内に飲み込まれた後、しばらく動かずにペニスに感覚を集中させる

絶頂を迎えたばかりの膈内は、膈壁が脈打つような鼓動と共に時折じんわりと締め付け、まるで射精後のペニスから精液を搾り取るような動きを見せていた

「ふふ…感じる感じる、お前の膈内の鼓動がな」

締め付ける膈壁を押し返すようにしてペニスに力をこめる

「あっんっ」

快感で満たされた膈内をさらに刺激され、堪えきれない様子で喘ぎを漏らす

「ふふっ、ずいぶんと女々しい反応ができるじゃないか」

「気分はすっかり互いを求めあう男と女、といった感じかな？」


ペニスが完全に彼女の体内に飲み込まれた後、しばらく動かずにペニスに感覚を集中させる

絶頂を迎えたばかりの膈内は、膈壁が脈打つような鼓動と共に時折じんわりと締め付け、まるで射精後のペニスから精液を搾り取るような動きを見せていた

「んっ…あっ、ああんっ…」

自らの体を貫く感触に少しずつ意識を覚めさせる
なんとか抵抗しようとするも、まだ余韻が残る彼女は
力なくガクガクと足を震わせるのが精一杯で、そのまま
自らの重さに貫れるようにペニスを飲み込んだ

「んっ…はあっ…」




まだ意識も淡い彼女の体を抱え上げると、ドンドンと反り返るようにして突き上げるペニスの上へと跨らせる。開いた花弁は、飢えた獣のように愛液を滴らせ、押し当てたペニスを難なく受け入れ、さらに奥へと導いてゆく。

「んっ…あっ、ああんっ…」

自らの体を貫く感触に少しずつ意識を覚めさせる。なんとか抵抗しようとするも、まだ余韻が残る彼女は力なくガクガクと足を震わせるのが精一杯で、そのまま自らの重さに貫れるようにペニスを飲み込んだ。

「んっ…はあっ…」



まだ意識も淡い彼女の体を抱え上げると、ドンドンと反り返るようになって突き上げるペニスの上へと跨らせる
開いた花弁は、飢えた獣のように愛液を滴らせ、押し当てたペニスを難なく受け入れ、さらに奥へと導いてゆく

痺れるような感覚が全身から股間へと凝縮し、鮮明な快感となつて湧き上がる

ペニスが激しく脈打ち、ポンプのように大量の精液を汲み上げ注ぎこんでゆく

「ああ…膈内（なか）に…気持ちいいのが…いっぱい〜んんん…」



痺れるような感覚が全身から股間へと凝縮し、鮮明な快感となつて湧き上がる

ペニスが激しく脈打ち、ポンプのように大量の精液を汲み上げ注ぎこんでゆく

「ああ…膣内（なか）に…気持ちいいのが…いっぱい〜んんん…」

膣内に浴びせかけられる精液の進りは、確かな感覚となつて彼女をさらに深い快感の渦へと誘い、全てを飲み干すようにペニスを刺激し続けた

それに促されるように強い快感が全身を幾重にも駆け巡り、終わらない射精感となつて自らの体を満たし続けていた

「も、もうイヤようう…グスン…」

終わりの見えない陵辱に、それまで必死に保ち続けていた彼女の心はついに折れてしまったのが、それまでとは一転して弱弱しい姿へと変貌していた

「おやおや、最初の威勢はどうした？
お前ほどの女ならこの程度の責めで
そう簡単に屈するものでもあるまい」

「それとも最初の威勢が偽りで、お前も
一皮むけばただの女と言う事か？」





「楽しいシヨールを鑑賞させてもらった。
では今度は俺の番かな」

「な、まだ続けるつもり？ いったい
とれだけ私を翫れば気が済むの？」

「さあな、こいつに聞いてくれ」

ペニスは、まるで射精した事など忘れてた
かのように固さを取り戻し、天に向かつて
そそり立っていた

「たとえ出すものが枯れても、コイツが
おさまらない限り、お前の穴が擦り切れ
ようと終わらせはしない」

「はあ…はあ…」

彼女の体を後ろから抱え込むと、大きく両足を広げさせた
たつぷりと注ぎ込んだ精液が膣内から濃厚な滴りとなつて
溢れ出す

陵辱の限りを尽くされ、幾度となく絶頂に導かれた彼女は
身も心も消耗しきつた様子で、抵抗する気力も尽きたのか
力なく身を預けるままになっていた



「はあ…はあ…」

彼女の体を後ろから抱え込むと、大きく両足を広げさせた
たつぷりと注ぎ込んだ精液が膣内から濃厚な滴りとなつて
溢れ出す

陵辱の限りを尽くされ、幾度となく絶頂に導かれた彼女は
身も心も消耗しきつた様子で、抵抗する気力も尽きたの
力なく身を預けるままになっていた

「ふふ、女どいえともいつい何度もイカされ続けろはねすがた
堪えるようだな」

「とはいえお前の体を堪能したい男はほかにもいるのさ、
まだまだお楽しみは終わらせはしない」

「ほほ、どうやらよろしくや〜んごきもお〜いぼれに与る事が
できるようじゃな」

「では今度は私の趣向で楽しんでませ〜んからお〜んごき〜ん」

傍らにいた男が立ち上がり、二人の結合部へと顔を近づける

「~~~~、まだまだ幼さを感じさせる性器じゃ…」

「その少女の幼裂が肉棒の味を知ったか、いい具合に熟しておるわ」

「甘酸っぱい淫臭に満ちた果実の味、たっぷり堪能させてもらおう」



傍らにいた男が立ち上がり、二人の結合部へと顔を近づける

「~~~~、まだまだ幼さを感じさせる性器じゃ…」

「その少女の幼裂が肉棒の味を知ったか、いい具合に熟しておるわ」

「甘酸っぱい淫臭に満ちた果実の味、たっぷり堪能させてもらおうよ」

尖らせた舌先を割れ目に沿ってなぞらせ、丹念に舐めあげる

「やっ…んっ…」

生暖かく柔らかい感触が、快感となって彼女に喘ぎを漏らさせる

「んむっ…若さゆえの濃厚な味わい、実に美味じゃ」

男の舌先がペニスへと伸び、キャンディを舐めるような舌使いで玉袋から竿に向かつて溢れ滴る精液を舐めはじめた

「おっ、おいおいっ、俺はそういう趣味はないんだ。舐めるなら女のほうだけにしてくれ」

尖らせた舌先を割れ目に沿ってなぞらせ、丹念に舐めあげる

「やっ……んっ……」

生暖かく柔らかい感触が、快感となって彼女に喘ぎを漏らさせる

「んむっ……若さゆえの濃厚な味わい、実に美味じゃ」

男の舌先がペニスへと伸び、キャンディを舐めるような舌使いで玉袋から竿に向かって溢れ滴る精液を舐めはじめた

「おっ、おいおいっ、俺はそういう趣味はないんだ。

舐めるなら女のほうだけにしてくれ」

挿入されたペニスを慌てて引き抜く

「さあ、これで思う存分味わってくれ」

「んっ、んっ、借しいのう、男の良さを知らぬは快樂の半分も知らぬ事と同じじゃな」

「ふっ、俺はまだその域には達していないのでね。
アンタから見れば俺もまだまだ未熟な若造だろうな」

男は青臭い精液の臭いにまみれた肉ヒタの間までも、まるで掃除をするかのように丁寧な舌使いで隅々まで舐め取りその味わいを楽しんでいた

男の舌先がペニスへと伸び、キャンディを舐めるような舌使いで玉袋から竿に向かつて溢れ滴る精液を舐めはじめた

「おっ、おいおいっ、俺はそういう趣味はないんだ。

舐めるなら女のほうだけにしてくれ」

挿入されたペニスを慌てて引き抜く

「さあ、これで思う存分味わってくれ」

尖らせた舌先を割れ目に沿ってなぞらせ、丹念に舐めあげる

「やっ……んっ……」

生暖かく柔らかい感触が、快感となって彼女に喘ぎを漏らさせる

「んむっ……若さゆえの濃厚な味わい、実に美味じゃ」

舌先の刺激に膣口がきゅっと収縮すると、注ぎ込んだばかりの精液が泡を立てながら溢れ滴り出る

「ほっほう、なるほど、新鮮で濃厚な子種をたっぷりとその膣内に湛えておるわ」

「ザーメンも愛液も、とちらも蜜の味じゃな」

男はそれを躊躇することなく舐めとると、口の中へと運んだ

「ぐんぐん、惜しいのう、男の良さを知らぬは快樂の半分も知らぬ事と同じじゃな」

「ふっ、俺はまだその域には達していないのでね。アンタから見れば俺もまだ未熟な若造だろうな」

男は青臭い精液の臭いにまみれた肉ヒタの間までも、まるで掃除をするかのように丁寧な舌使いで隅々まで舐め取りその味わいを楽しんでいた

舌先の刺激に膣口がきゅっと収縮すると、**注ぎ込んだばかりの精液が**
泡を立てながら溢れ滴り出る

**「ほっほう、なるほど、新鮮で濃厚な子種をたっぷりとその膣内に
湛えておるわ」**

「ザーメンも愛液も、とちらも蜜の味じゃぞ」

男はそれを躊躇することなく舐めとると、**口の中へと運んだ**

「んむ、これぞ若き男と女のエキスの味、淫靡で濃厚な味わいじゃ」
**「ワシのような年寄りには若き男と女の契りの証をこそ命の源泉。
全身に活力がみなぎるようじゃ」**

小さくしなびた男のペニスはムクムクと頭をもたげ、
みるみるその大きさを増していった

「な、なんて気持ち悪い男なの…!」

男の異常ともいえる性癖を目の前に、彼女は不快感に満ちた表情で言い放った

「ククク、その侮蔑に満ちた言葉も眼差しも、ワシにとっては失いかけた血潮を漲らせるエキスよ!」

「だがまだまだ足りん。もつと、もつとたくさんさんのエキスでこの老いた体の乾きを癒しておくれ!」

「んむ、これぞ若き男と女のエキスの味、淫靡で濃厚な味わいじゃ!」
「ワシのような年寄りには若き男と女の契りの証をこそ命の源泉。全身に活力がみなぎるようじゃ!」

小さくしなびた男のペニスはムクムクと頭をもたげ、みるみるその大きさを増していった

「バ、バカな事言わないでっ、そんな事できるわけないでっみん」

「そうか？ 今日トイレに行かせていないから無理せずとも自然と溜まっっているんじゃないか？」

彼女の下腹部に手をあててくっくと押さえた

「やっ、だめっ」

何度か刺激を与えると潮のよぼよぼと「ヒッ」と聖水を溢れさせ

男は膣内に満たされていた全てを飲み干してもなお足りない様子でさらに食欲に求め続けた

そして今度は舌先で彼女の尿道の辺りをチロチロと刺激し始めた

「ぶぶ、じゅうやら今度はお前の聖水をお望みらしいぞ」

「ん、あ、あめこよくンタイっ」

「構いっとはないぞ、思う存分飲ませてるがいい」

舌先の刺激に耐え切れず勢いよく黄金水を溢れさせた

「おほおお、聖水じゃ…若き湧泉の迸りじゃ…」

「ああっ…あああつタメ…とっしこ……止まらないようっつんっ」

まるで決壊したダムのように勢いよく放たれた黄金水は
そのまま男の口へと注ぎ込まれた



舌先の刺激に耐え切れず勢いよく黄金水を溢れさせた

「おほおお、聖水じゃ…若き湧泉の迸りじゃ…」

「ああっ…あああっダメ…とっして…止まらないようっつ…」

まるで決壊したダムのように勢いよく放たれた黄金水はそのまま男の口へと注ぎ込まれた

「んっ…んっ…ぶはああっ」

咽るような声を漏らしながら溢れ出る黄金水を喉を鳴らし飲み干してゆ〜

「ああ…ああ…至福じゃ極楽じゃ…」

恍惚とした表情を浮かべ、零れおちる滴を手でぱく取り自らの体へと浴びせかける

わずかに勃起したペニスは小さく痙攣し、白濁した液体をじんわりと滲ませていた

憔悴した彼女は、激しく突きいれられる
ペニスにも、もはや鈍い反応を返すのみと
なっていた

「んん…んんん…」

「どうして、どうして私がかんな目で
遭わなきゃいけないの…」

「そう悲観するな、男をここまで貪欲に
駆け立てる女もそうはいないんだ。
むしろ光栄なことと喜ぶべきだぞ」

「その通り、女の価値はいかに男を
狂わせるか、それに尽きるというもの」
「とれ、ワシは後ろの蕾の味を堪能させて
もらひんじょう」



男は萎えかけていたペニスを自らの手で
しごき勃起させながら小さな蕾へと
ねじこんだ

「ああっ……んんっ……」

「おお……この老いぼれのしなびたペニスを
狭い入り口がいい具合に締め付けて
くれるわい」

「お前からもらった活力をとす黒い欲望
に変えてその体に注ぎ込んでやる。
お前も同じ欲望に囚われた獣となるのだ」



湿った空気と性臭漂う密室の中で、二人の
男が肉の玩具を相手に尽きる事のない欲望を
吐き出し続けた

A character with long, flowing orange hair and bright blue eyes. She is wearing a red and yellow outfit that is partially open, revealing her chest and midriff. She has a red collar with a grey mechanical component. Her arms are raised, and she is looking directly at the viewer with a slight smile.

「ふふふ…」

「な、なによ…」

欲望を含ませた笑みを跳ね返すように鋭い視線で睨み返す

「これからお前がどんな女の顔、姿を見せてくれるか
楽しみでね」

「私に変な事したら許さないわよ」

「変な事？ するのはいい事ね」



バイブレータを取り出し、彼女の股間へと押しつけた

「ちよっ…なによそれっ…ひゃあっ！」

スイッチを入れると、激しい震動が彼女の敏感な部分を刺激しはじめた



バイブレータを取り出し、彼女の股間へと押しつけた

「ちよっ…なによそれっ…ひゃあっ！」

スイッチを入れると、激しい震動が彼女の敏感な部分を刺激しはじめた

「ひっ…やめっ…やっ…あっ！」

「ぐん、ぐん、いい喘ぎっぷりだな」

痺れるような感覚が彼女の体を突き抜け、大きな喘ぎと共にビクビクと体を震わせる



「ひゃ…んっ…はあっ…」

「ふふっ、お前の性格に反して素直で正直な体だな」

「い、こんな事で思い通りになると思ったら大間違いよ」

「精一杯強がっているつもりだろうが反応も表情も」

「ただの女に戻っているぞ」

「一度…た女なんてあっけないものね」

「ひゃ…んっ…はあっ…」

「ふふっ、お前の性格に反して素直で正直な体だな」

「い、こんな事で思い通りになると思ったら大間違いよ」

「精一杯強がっているつもりだろうが反応も表情も

ただの女に戻っているぞ」

「一度でも女の快感を知った女なんてあっけないものさ」

「バ、バカじゃないのっ、言ってるでしょ、アンタが何をしようとするを…わたっ…わたわたっ…」

「はあんっ…んっはああっ！」

「ククク、それが答えか？ 面白い女だなお前は」

「これまでどんなプレイを仕込まれた？」
「その体を駆使してどうやって男を喜ばせるか、そんな術も教えられたんだろう、どうだ？」

「やんっ…ああっんっ…はああっ…」

侮辱的な言葉を浴びせかけるも、そんな声など耳に入らない様子で抜けるような喘ぎを漏らし、溢れ出る快感に必死に耐えていた

「バ、バカじゃないのっ、言ってるでしょ、アンタが何をしようとするを…わたっ…わたわたっ…」

「はあんっ…んっはああっ…」

「ククク、それが答えか？ 面白い女だなお前は」

「これまでどんなプレイを仕込まれた？」
「その体を駆使してどうやって男を喜ばせるか、そんな術も教えられたんだらう、どうだ？」


「やんっ…ああっんっ…はああっ—」

侮辱的な言葉を浴びせかけるも、そんな声など耳に入らない様子で抜けるような喘ぎを漏らし、溢れ出る快感に必死に耐えていた

「ああっ…ダメッ…止めてっ…止めてっ…ひいっん—」


甘い喘ぎは次第に叫びに変わりつつあった
絶頂が近い様子で激しく体をくねらせパイプから逃れようとする。

逃がすまいと体を押さえつけ、一層強くパイプを押し当てた
「ひいっ…許してっ…だめええ—っ—」



大きな叫びと共に全身をピンと硬直させた後、下半身を
ビクビクと震わせる
そして水音と共に股間部分をじんわりと大きな染みが広がり、
床へと広がってゆく

「はあ…はあ…」



大きな叫びと共に全身をピンと硬直させた後、下半身を
ビクビクと震わせる
そして水音と共に股間部分をじんわりと大きな染みが広がり、
床へと広がってゆく

「はあ…はあ…」

強い緊張の後、がっくりと全身を弛緩させ、呆然とした様子で
遠くへ虚ろなまなざしを向ける
膣口はまるで生き物のようにヒクヒクと収縮を繰り返し、
深く長い快感の証を示していた



パイプレータには染み出した愛液が、粘り気のある糸を引き絡み付いていた

「ほほう、ずいぶん感度がいいじゃないか」

「ハア…ハア…」

パイプシュータには染み出した愛液が、粘り気のある糸を引き絡み付いていた


「ほほう、ずいぶん感度がいいじゃないか」

「ハア…ハア…」

「まだまだ発展途上の体と思っていたが、一人前に女の快感だけは知っているようだな」

「バ、バカな事言わないでっ…」

「ふふっ、俺は見たままをいつているだけだが」



スーツの股間部分をくりぬくようにして切り取り、露にさせる

「ふっ、見てみる、自分のオマ○コを、嬉しそうに涎を零して
メスの匂いをプンプンさせているじゃないか」

「ア、アンタの勝手な思い込みで決め付けないでっー」

「くくっ、目は口ほどに物を言うっじゃないが、女は何よりも
下の口がモノを言うっのさー」